

中村座筋書

特 54

23



立て東の果へ逃るとやら厄介者の此小兒は儘にそちらへ返し升と無理に押付逃て行く跡暗闇に成り菊三郎の絹商人の供と鶴藏の婆ア出て来りだんまり摸様に成る能程に川の中より人翹出て飛行く穉幸恠りする此件よろしく幕

○本舞臺土山鈴鹿時地藏堂の道具爰へ松助の絹商人榮次郎の伊勢參に荷物を持せ出て来り此堂で待合たら供の男が來様から貴さまは先へ行くがよほど駄賃を遣る榮次郎は禮を言て別れ行く後ろの影影より菊五郎菊四郎秀五郎宇十郎のさまの蠅出て懐ろの金を出せと言ふ松助恠りして逃に罹るを四人にて取巻居る爰へ菊五郎の權八旗形の浪人にて預掛り四人を刀の棟打にて追散し松助に路用の無心を言ふ(松)扱はよなたる盜人だなど逃に掛る菊五郎守腹して松助を抜打に伐る(菊)雛子も啼ずば打れまひに益なき殺生致たわへト邊へ思入有て刀を鞘へ納め彼等が現ひし所持の金子ト松介の懐中より金包を出して懐ろへ入れる此時後ろの辻堂の内より福介武術修行的の控へに

て出て余り見事な手の内試合の勝負が致したイト是より兩人木の葉を集め焚火をして真劍の試合に成り双方角の手練にて(福)掛る手利のそこ元と立合しは拙者の幸福御姓名を伺ふ前方我姓名を申上ん手前事は備前岡山の浪士にて五百原正作と申者シテも手前の御尊名はな(菊)手前は因州鳥取の浪士平井權八と申者(福)扱は平井兵左衛門殿の御子息にて有しよな拙者が父は此右衛門連先年有馬の湯治場にて郵座敷の徒然に互ひに御懇意結びし者ト是より江戸へ下りて再會なさんと立別れる件にて幕

○本舞臺坂の下杉林の道具爰に市藏の官代中間を引連れ前の百姓四人へ昨夜鈴鹿山にて人殺しの様子を咄し怪敷者と見たら訴へると云渡し皆く上手へ這入る杉林のかげより家藏新藏の兄弟出て今の咄しの様子では又上を討て立退く權八の手の内に符合致せし昨夜の物取若權八の業ではなにかト嘲をして居る爰へ上手より福助の八藏出て来りや二人様お悦びなされませ昨日草津で別申お先

急ぐ獨旅只今關の地藏前にて見懸し浪士は正しく權八お知らせ申に引返し升た(家)能ぞ早速知らせ呉しぞ(新)片時も早く跡追駈ト行に懸る此時上手より平藏の代官百姓四人出て怪しい浪人詮議があるト家藏新藏を取巻く福介は心のせくまなしにて別れて這入る此件宜敷道具廻る

○本舞臺龜山榎下の道具爰に松之介の郎娘旗形にて両掛の荷物へ腰をかけ鶴藏若徒の親仁にて附添ひ休居る向ふより菊五郎の權八出て通懸るを兩人見當て(松)おなつかしや權八機月御様のお慈悲にて世間は實家の里方へ歸りし体にする程に佐五平連て東路へ悴の跡を尋ひ行き他國で一生添透よとあ情余るお詞に心細くも遙々下り升たる此道中折よくお目に懸り升たは盡ぬ其縁と思召御一所に江戸表へお連れ被成れて下さり升せト取すがるを子細に在て本庄助太夫を討て申退く此權八敵持身に女と連れ道中は致し難しと振切て行く跡へ福助家藏新藏追かけ来て此所に八重梅と佐五平が居るからは權八と一所で有うと

疑ふ兩人は全く一所ではなひと云譯をする件にて廻る

○本舞臺四日市の裏手漁師の住居一軒家の道具爰に千鳥の世話女房の竹松の伊勢參の奴居候をして居て酒を買に行く跡へ菊五郎來り行暮したる旅の者故一夜の舎りを御無心中度と頼む千鳥は是を断る奥より市藏の漁師實はさまの蠅の頭にて出て来り舎りを貸て進せると菊五郎を内へ入れ早々寐かしてあげると女房に案内させて一間へ入れる(市)身形は立派でねへけれど一寸白眼だ懐に路用の金もまんざらにはした金ではない様子あゝいふ鳥と見返すとは噂アのとぢにも困つたものだト竹松酒を買て歸り奥より千鳥出てあの侍を内へ止たのは悪事を働く氣で有ふが悪い心は止めて呉と意見をする市藏奥へ聞ては大事故女房をだまし酒の支度をしると千鳥竹松に云附奥へ入れる爰へ菊五郎菊五郎秀五郎宇十郎のさまの蠅歸り来て夕ア鈴鹿山で若衆の侍に仕事の邪魔をされたと嘯す(市)其侍は奥へ止て寐かしてあるト是より皆々所詮夕ア

の手並では尋常では叶はぬからしびれ薬を酒へ入れて香せ様と相談極る竹松の奴出て薬を酒へ入れて侍に香せ外の者には只の酒を香せる酌の仕方を云立薬を預り奥へ送る市藏一間の内より菊五郎を引連れて来て實は私共は漁師が隣の所から旅稼として居り升が昨晚のお手並に子分の者が恐れ入お詫の爲に一献差上度と女房を呼出し酒の支度をさせ菊五郎へ酒を進める竹松酌をして徳利の酒を間違へ菊五郎に只の酒を香せ皆々にしびれ薬の酒を香せる愛へ捕手来り菊五郎は退れて行く迹皆々繩に懸る此件宜義幕

○本舞臺西尾道の道具爰に百姓四人竹籠を持立懸り居て此頃夜に入ると變化が出て村中の赤子を浚つて行く故吉田の火打坂に居る獵人の繁藏といふ者を頼んで變化退治して貰ふ積だト愛へ家橋の宗三郎瑞幸のお袖赤子を抱て出来り道迷ひ日は暮れるこんな困つた事はないと常感して居る勘五郎の履ひを油さしを持出て来る家此

近邊に宿屋はないかと問く(勘)爰は西尾村の在方て宿屋へ遠所だが一体どこから來なかつた(家)西尾在に知るべが在て尋ね参つた旅の者以前は西尾の郷士にて野崎主膳と申者を使つて参れど道は知らず困つて居るのでござり升(勘)野崎様なれば内中死絶に今は獨の御老母が此先の法光寺村にかすかに暮してお出故案内して上りト三人連立東のあゆみを廻り花道へ掛る是にて道具廻る

○本舞臺古寺の道具に成る三人舞臺へ來る奥より菊五郎老婆の指へにて出ておくらどの戻られたか誰ぞ連立て來た様子(家)伯母上暫くお目に掛り升せぬ三條の織物師西川宗三郎でござり升る(菊)絶えて久しき宗三殿能ぞ尋ねてはせられたト是より伯母朝の名乗り合ひ在て今宵は夜と共咄し升らうくら殿二人を奥へ案内して遣下さいト勘五郎先に家橋瑞幸奥へ這入る向ふより松助の坊主案内をして福助の武者修行出て來り同じく舍りを願ひ菊五郎承引する松助案内して福助奥へ這入る菊五郎跡を見送り

道に迷つて幽寺へさまよひ來れば此先は行處のなみ冥途の旅二人ならず三人四人今宵は得物が深山あるわへト正面の破籠の内へ這入る跡へ上手より家橋瑞幸出て寺へ泊るのは氣味の悪い物だと云て居る下手より勘五郎抱子を背負ひ出て來り廿六七のお内義さんが夫宗三郎に逢ひ度と尋ねてお出てござり升と知らせる兩人胸りする下手より秀調のお嫁出てコレお袖殿長々の道中をよふも夫の介抱して愛迄連立來なさんしたと瑞幸に詰寄る愛へ福助の正作出る是に恐れて秀調は消る跡に皆々扱は今の幽霊で有しかと云ふせり渡り此道具廻る

○本舞臺古寺本堂の道具菊五郎上手の破れ御籠の内より出て子供等はとまへししか早戻つて來ればよほど待院居る下手より勘五郎抱子を背負ひし儘出て來り行燈を灯し無油ぶらを買て來た咄として菊五郎に産れ年を聞れ子の年だと言ふ菊五郎好もしと思入勘五郎抱子を菊五郎に渡し下手へ這入る跡に菊五郎抱子をいぶり付そなたは

誰が子誰が娘と問を譲ふ猫二足出て踊る下手より勘五郎出てよりや猫かど大きく云ふ猫二足遊て這入る愛へ上手より以前の瑞幸出て來りお影さまで大きに樂を致し升たき抱子を請取禮を云つて上手へ這入る勘五郎は本堂の隅へ来る菊五郎寐息を考へ行燈の油をなめる勘五郎目を覺して見る菊五郎是と悟り勘五郎を喰殺す事あつてと死骸と食はへ正面の籠の内へ這入る跡へ家橋瑞幸抱子を抱出て枕に附ケと懸られぬと云ふ下手より松助の雲鏡酒に酔しこなしにて出て此頃夜なく此邊へ妖怪が出て赤子と取つて喰ふと云ふ咄しをしてとのおのが手に苦しき正面の御籠の内へ引込れる是と一時に赤子を御籠の内へ引込れ家橋瑞幸胸りする上手より以前の福介出て扱を變化の仕業ならんと愛へ百姓大勢竹籠を持出て來り何ても變化は此古寺と皆々にて立掛る後ろの御籠の内へ大猫の形顯はれる福介御籠を切拂ふ内に菊五郎十二單の老女にて鏡臺に向ひ鮑貝にて飯椀を附て居る是を皆々詰かけ本

性を願はせど福介刀を抜て差付る(菊)残念や口惜や剣に
 彫し不動の梵字に我本脉を包難く今こそ名乗る我こそは
 元大和の國金峯山の奥に産れ數千年の功を経て又と共に
 攝津の國大坂城の北の橋に年久敷住居しが落城の折我父
 はほのふの中に身を果し此身は幸く退れしが恨に思ふ徳
 川の本國三河に飛行なし西尾家の老女にて二尾といひし
 を啗殺し姿を借て國中を隠さんと思ひしも望叶はぬ上か
 らは見よく此場で汝等も修羅の苦げんを見せてくれん
 ト是より荒れの鳴物に成り菊五郎古猫の形に成り皆々と
 立廻り本堂の破風を破り退れ出る此時本鉢碗の音して猫
 に當り猫は苦しみ落る向ふより二役の菊五郎狩人の格へ
 にて鉢碗を持出て來り(菊)覺に手さたへ仕止めし古猫ト
 皆々悦ぶ此件よろしく幕

○本舞臺吉田宿火打板狩人住家の道具爰に繁松の在所女
 房抱子を抱き乳貰ひに來て居る榮之助の娘守子守唄を囀ひ
 政次郎の娘娘机に向ひ手習をして居る爰へ幸右衛門の庄

屋重箱を提出て來りし限殿は内にかと云ふ與より福助世
 話女房の拵へにて出る(幸)繁松殿は今度間崎へ歌を打に
 行れたどの事まつちの内へ預けてあるわしの悴の與太郎
 のけふ誕生日に當るゆゑ赤の飯を焚たから里親殿へも持
 て來たト重箱を出す(繁)ほんにこちらのお腹さんは子供
 を亡して乳が澤山ある故お庄や様の子供を預りわたし迄
 か乳貰ひに來升たと幸右衛門繁松連立て歸行く跡に福助
 重箱を明て見て庄屋様から御叮嚀に御看送澤山下すつた
 と悦び居る向ふより傳五郎の狩人貳舛轡を提菊四郎秀五
 郎の狩人仲間連立出て來り繁松の留守に一杯呑に來たと
 言ふ福介重箱の肴を出して振舞ふ三人の狩人酒に酔ひ自
 分の女房を悪くいひ福介を譽め傳五郎の女房に成れと口
 説く爰へ鶴藏菊三郎宇十郎狩人の女房の拵へにて出て門
 口に向ひ居て内へおはれ込が夫婦喧嘩に成り女房三人逃
 出すを狩人三人追懸遣入る(福)いかに山家の産れ連亭主
 も亭主女房も女房様らな事でも有た様に大騒上て馬合ひ



ほんにあられた物じやわひなアト抱子を寝かし榮之介政
 次郎は薪を拾ひに山へ行く跡へ松助乳貰ひの在所女の拵
 へにて抱子を抱き出て來り私は隣村てかすかな事を致
 す者貧苦に迫り氣をもむゆゑ乳が出ぬので御覽の通り瘦
 衰へし此幼子も情ふ慈悲にお乳を一口吞せて遊て下さい
 升と泪乍に頼む福助氣の毒に思ひ抱子を抱取乳を吞せて
 やる暖入りし抱子泣けず故是を松助抱上げ守を仕乍門口
 へ出て向ふへ遣入る福助是を知らず乳貰ひの子に乳を吞
 せて遊て居る向ふより菊五郎の繁松歸り來り首尾よく聞
 諭て猫を打止て入手柄を仕たと叫す福助も悦ぶ事在于乳
 貰ひが門口に居ぬ故驚く菊五郎様子を問庄屋様から里に
 取つたあの與太郎を入手に預しては濟ぬと氣をもむ向ふ
 より以前の鶴藏出て來り繁松どの歸られたかこなたの留
 守にお賤ごのがわたしの亭主を引入れてちりり合て居
 たのが元で喧嘩をして松助に打れたと言ふ福助云譯をす
 れども菊五郎疑ひ酒肴の取ちらしてあるを咎めまだ去斗

りか見ず知らずのものに大事な幼子を預けて遺つたはあのれがぶ念だと立腹する鶴藏は悪口を言ッて歸り行く跡へ政次郎の娘歸り来て今山から姉さんが谷底へ落たと知らせる菊五郎恠りして山へ走り行く跡に福介夫へ言譯に自書して死ぬ覺期政次郎清書双紙へ母の仰せ書に書置を書く福介娘とさし殺し自害をして死ぬ件にて道具廻る

○本齋盛二川在山中谷底の道具爰に菊五郎榮之助の娘を介抱して居てありやち辰午前早く助け様とおれも今山から落て膝をひどく打たがともそなたは怪我はせぬか(榮)散は少し打升たが疵はとまにも御座せぬト菊五郎元の山へ登らふとして數丈の切立の岩故上れぬまなしにて困つて居る後ろの山の上へ幸右衛門の庄屋出てそこに居るのは繁藏さんかそなたの女房のお賤どのがわしから預る子を失ひ濟ぬと云つて妹娘を刺殺しその身も自害を仕て死だ跡に残つた此書置と山の上より清書双紙を下へ投落しおれは是から代官所へ檢使願ひの書面を書くから谷

を廻つて早くとざれト首捨て走り行く跡に菊五郎榮之助の書置を讀み不便な事をさせたわへト涙にくれる事(菊)今更云の思知ながら接たいしい女房を疑つたは我誤り遂には狭心から女房娘が非業な最期其死顔を見様にも屏風の様な岩山に翅なければ上られずいかなる事か此様におれに難義が重なるか此時榮之助へ猫の變化乗うつりしてなしてに庄屋の悴を奪ひしも女房娘が自殺なせしも我通力になせし事見よ、今に故をも取殺すから思知れト榮之助猫の思入にて菊五郎へ飛かゝる菊五郎山刀を抜ておどしに切排ふはづみに榮之助を一刀切る榮之助苦しみ息絶ゆる菊五郎恠りしておどしに抜た刀にて娘お辰を切殺せしかけふ一日に女房はじめ二人の娘が非業の最期かゝる愛目を見るといふも三州西尾で打留し猫の崇りてあつたるかト折しも吹来る一順の風に木の葉のひらくと目先に残る怪猫と渡りくぐりつ切排ふ妖魔の崇りを恐しきト此内縫くるみの猫一疋出て菊五郎に飛掛る

を切排ふ立廻り在るに己が手に咽へ刀を突き立てる件にて幕

○本齋盛金屋宿旅籠屋見世先の道具爰におんま一人留女二人若者一人行燈の掃除をして居て此行燈は落書がしてあるが正面に出てゐるのが江戸新吉原江戸町登丁目三浦屋内小紫其又右に出てゐるのは違ひた見たら飛立斗り籠の鳥かや恨めしや左の方に出てゐるのは清元延壽太夫清元梅吉とあり升と此筋を賣り皆く行燈を提て奥へ遣入る向ふより秀調の宿やの女房政次郎の悴を連れ醫者を呼かけ出て來りそこへ御出被成るのは竹庵様ではござりませぬか(醫)今こなたの内へ見舞ひ升所じやト皆々歸登へ來り御主人入藏殿の眼病は雞目の病ひに違ひなひと醫をして皆々奥へ遣入る是にて道具廻る

○本齋盛江戸吉原三浦屋の貳階小紫部屋の道具とろくの鳴物にて道具留るトさしがねの蝶出てうしろの屏風の内へ消へる跡知らせに付下手の淨瑠璃のいすを巻上る爰に清元連中居并び淨瑠璃に成る上手より榮之助明石

の根柢新造鐵籠を持出る同じく上手の家体より菊五郎の權八松之介の小紫子役の禿一人附添ひ出て來り皆々せりふ渡り榮之助介明石手拭ひを遣ひ振事よろしく有て納る此留り下手より榮次郎子供のたひこ持にて出て同じく振事あつて菊五郎松之介兩人うしろの屏風の内へ遣入る跡に新造禿次の門てなんぞして遊ばふト打連て遣入るしらせに付道具廻る

○本齋盛宿屋の奥座敷の道具爰に菊五郎の權八松之介いせんの接摩揉んで居てお客様はいひ心持にお寝成つたが足じやア揉むのはむだな事だ此儘だまつて歸らうかいヤ、そんな事をすると見世へ悪ひいつと起してお聞申さうモンお客さまもつと揉ませうかなトゆり起す菊五郎目の覺しまなしにて(菊)療治を仕ながらそちが咄しの吉原の夢を見たがイヤ中々な全盛にてそちより聞し小紫が實意を盡せし扱ひに田舎育の身共杯は前後忘却致す程嬉しき夢を結んだと思ふはやつはり夢の中はつと思ひし其

汗も目が覺たら寝汗であつた。按摩に療治代をやりあんなまは禮を言つて歸り行く跡へ福介宿屋の亭主眼病のこなしにて出て來り(福)「へい私は小泉屋八藏にござり升るが今日はよふまそ泊下り升た先刻はお茶代を有難よござり升ト禮を言ふ菊五郎此体を見てゐるとはどこか見た様だが出生は當地の者か(福)「いえ私はお客様と同じ生國で因州鳥取でふり升(菊)どうしてそれを(福)まだ御幼年の時分ゆゑに見わすれ被成れ升たらうが手前は本庄助太夫の若徒八内めてござり升る(菊)「さつぱりと見忘れたが八内であつたるかト惡ひ所へ泊合せたと云ふまなし(福)「等へ升れば十三年跡同家中の若徒と口論の末疵を負せ主人の勘氣を蒙つて國を追放されゆゑさびなく旅路をさまよふ内縁に在て宿引に當家へ奉公任致し先非を悔て一生懸命出精致して勤升たが先主人の目録に叶ひ養子と成て只今では當家の主に成升たまだ日暮前てござり升れば御ゆるりと御休息下さり升る風呂が満升たらあ知

ら申升るト下手へ這入る跡に菊五郎思入あつて世を忍ぶ身に名の高い旅籠屋にては人目わるゆゑ忍昇の進めにより斗らず此家へ泊りしが敵と現ふ本庄に以前勤めし八内があるに成とは知らざりしよりやめつたに油断はならぬわへト道具廻る

○本舞臺宿屋の帳場の道具爰に家桶の助七羽織着流し一本差にて住居下手に福助と秀調の女房住居(福)助七様お悦び被成れ升せ尋ねる敵の權八が手前方へ斗らずも今宵泊てござり升る(家)何權八が泊りしとは夫は思はぬ幸ひなり名乗合せて勝負をなさんと立懸るを留て(福)お心はやるはお道理ながら折あしく御命弟の助八様が今日も敵を尋ねに御他出なされ是にお出なされねばお歸りある迄暫の内御猶豫を成れ升せ(家)泊り鳥が時へ歸る最早日暮に間のなきにせ助八は歸らぬかと待詫る(福)只今悴を捜しにだし升たればさんじお待下さり升せ此時下手が政次郎の悴新藏の助八を連れて歸り來り(家)是にて九弟勘

ふ上は奥へ踏込本窓を透る政次郎逃るぬ様に見て來升と奥へ這入り出て來り今のお客が奥に居なひと云ふ秀調の女房奥へ這入り手紙を持出て來り座敷の隅々捜せし戸棚の上にもんな手紙がござんしたと出す福介手取上書を見て本庄助七殿同助八殿平井權八と讀む家桶中を開き見て今宵成の刻の鐘を合圖に蓮壽寺の松原に於て敵討の勝負致すべくと存候間其時刻より用張致されべく候ヌリヤ當宿の松原にて此時本釣鐘を打込(秀)最早幕六ツ鷄目の時刻(福)目見見へず共御供なと聲を知るべに覺への棒で盲打に打てくれんと皆々身支度をする此件よろしく幕○本舞臺うしろへ大井川を見たる松原の道具爰へ前幕の家桶新藏りしし拵へにて出て來り未だ權八來らぬ様子にて暫待合さんト此時跡々福介たすき鉢巻にて六尺棒と持政次郎の悴に手を引れ出て來り二人さまと家桶申せば是なる悴と杖となしお助太刀に參りしと言ふ家桶夫に附けても權八が只今以て見へざるは卑怯未練に逃失

しかト此時後の松の影より菊五郎出て最前より侍受あつたトおれにていざ立上つて勝負せよとあせると留て菊今の際に兩人へ申聞せる事あり助太夫を討たるは主君の御家の爲なるぞト懐中より連判状を出し奸智を以て立身せし國家老の篠原勘解由兼て御家を押領なさんと逆意を企つ荷懸人は御身が父の助太夫家中も過半一味なり益々倭人説者はびより我にも荷懸させんとてしばし進むる助太夫昔が今に叛逆の榮にし例にあらざれば謀叛は思ひ止まられよと意見なせ共聞いれず大事をもらせし上からは得心なくば其座は立せぬ翌期せよと拵へ手を拵切兼まじき振舞に止を得ずして討て捨しは逆意の根ざしを断ん爲則証詰の連判状其折奪ひ取たる故江戸へ立越し重役の松原氏へ訴へる迄は私ならぬ大事の骸不便ながらも返討だど屹度なる(家)善にもせよ惡にもせよ父の敵は供不藏天イテ一勝負仕れト是を拵り成り家桶新藏一刀つゝ切られる政次郎是を申しへる福介目の見へ

ぬ思入にて氣をもひ立廻りよろしく菊五郎真中にて刃を振上げ返り討たぞ觀念致せト此見得にて道具廻る

○本舞臺大井川の向ふ島田宿を見たる道具爰へ捕手八人出て聞き合上下へ忍ぶ向ふより以前の菊五郎逃て出て來り本庄兄弟兩人を返討にせし上は最早敵と視ふ者なしこれより河原を逆登り鹽越しにて向ふへ渡り閑道傳ひに逃延びんと此時どんくを打込むハテ心得ぬ俄に螺や太鼓を打は此權八を召捕んと正しく人數を集むる合圖向ふは大川の大井川容易に渡る事ならず爰へ捕手八人伺ひ出て打て掛る是より菊五郎立廻りよろしくあつてと押へ付られ繩に罹るはたぐに成り以前の福介走り出て來り主人の敵權八覺期と打て罹る捕手是をさへてヤア大罪人に手出らはならぬと留る(菊)助太夫は云ふに及ばず助七助八兩人を返り討に仕たからは主人の敵に相違ないが討事ならぬ天下の囚人(福)スリヤ此儘に手出しも成ぬか口惜(菊)嘸殘念で有ふがなトせしら笑ふ此件にて幕

○本舞臺府中馬町本陣門外の道具爰に菊三郎の若者と雲介二人立罹りけふまらの内へかつぎ込んだ綱乗物の四人は人殺しの四人もある大層な手利ださうだト噂をして雲介は歸り行く向ふより松之介の八重梅と鶴藏の佐五平出て來り菊三郎に頼み平井權八と言者の身寄のものゆゑ四人に對面願ひを取次て吳と言ふ菊三郎も役人に伺つて遣ふと門の内へ這入る跡兩人どうを願ひが叶へばよひがトあんじるセリふにて道具廻る

○本舞臺本陣御用座敷庭先の道具貳重に傳五郎の役人住居次の間に綱乗物一挺あり是に下役人二人附添ひ平舞臺下手に菊三郎扣へ居て美婦人があ役人様へ願ひの筋有とて門前へ參りしと言ふ傳五郎美人とあれば是へ通ヒと松之助鶴藏を呼出し願の筋を聞く(松)私事は權八の言號にて八重梅と申升る者何卒夫へ對面御免し下さる様願ひ升ると言ふ傳五郎是を聞立腹して囚人に對面扱とは以外の願ひ叶はぬ事だと呵り付け菊三郎松之助鶴藏を連



れて出て行く引違へて菊五郎の役人先に家柄塘幸に繩をかけしと格太二人に引立させ出て來り(勘)詮議の手づるに相成る奴を召捕參た其次第一人は京都三條にて織物渡世をせしと云ふ宗三郎と申奴又一人は祇園町にて藝子を致してあつたと申袖とやら云ふ商賣上り正しく盜賊權八の手先を働く同類と目申が附てござるのは只今宿の松原にて人足共が酒手をぬたり懸落者に相違ないと言かけあるは何事と立入升て調べし所まやつが所持なす金子と言ふは盜賊權八所持なせし金子と同一極印金同類なる事知れし故得と調べをなさんと存じ直に繩打引立升た則金子は是にありと小判を出す傳五郎改め見て扱はそやつは同類成しか(家)御役人様へ申上する只今途中の松原にて有体に申上升たが是なる女子を連升て東へ下る旅中にて路用の金子を遣ひ果し死ぬ外に仕様はなひと身を投擲とする所へ通り懸りし侍が二人を抱留様子を聞金で命が助るなら是を路用に遣はす間死ぬのはやめにするかよ

いと三十兩といふ金を二人へ恵んでくれ升た(傳)イヤ其言
譯相立ぬと是より勘五郎十手にて兩人を打すへる爰へ駕
に附添ふ下役人四人より聞取り前へ出て其御詮議は御無
用と駕の内より四人の申立にござり升るがあれなる二人
へ旅中にて三十兩の金子を恵み命を助け遣はしたに相違
はなひと升るといへども傳五郎取上ず矢張家橘璃幸を
打すへさせ居る爰へ下手より福介の正作出て其御詮議
暫く今般斗らず大井川にて召捕の平井權八江戸表へお
差立と旅中におゐて承り跡を惹ひて當宿迄只今立越の權
八の罪科の次第を糺さんと此御詮議の一部始終物影にて
伺ひしが全夫なる兩人が同類にてな事某先頃鈴鹿山
にて其夜の次第を見聞なしよつく存して罷りあり絹賣彌
市と申者賊に出合て難儀の折から權八が通り懸り其賊共
を追散らし其身も路用に乏しき故無心をいひしが元と成
り命の思ある平井氏へ悪口せしを血氣のあまり只一刀に
切捨て金子を奪ひし權八殿我も其場へ名乗合ひ親共より

の入魂の者と相知れて試合となし再會を約し立別れしと
云(傳)又同類が殖たるかど詮議に成る駕の脇の下役人前
へ出て駕の内より四人の申立今夫なる侍ひが申せし詞に
相違ないとの義傳)イヤく縁者の証詰役に立ぬといふ
(福)恵みし金子が仇と成り無實の疑ひ氣の毒ゆゑおのれ
と白状致せしを御賢察なき御詮議は余り御念が入過ると
論をして家橘璃幸の繩目を解せ助る事あつて拙者に御疑
念あらば江戸表迄お連なされと云ふ役人兩夫人には及ば
ぬと薄氣味悪く福助家橘璃幸を免しやり跡にて(傳)箇様
なやつは旅中にて狼藉なさんも斗られず明日より道をか
へてト囁き合ひひとかにくト駕の内へ憚るまなしにて
道具廻る
○本舞臺元の門前の道具に成る爰に家橘璃幸體の痛むを
菊三郎の若ひ者介抱して遣つて居てわしも以前は絹賣彌
市に仕はれた奉公人だが今度主人を殺した權八が四人と
成り敵はお上で取て下さるから返り討にならぬ様にたま

つて居ると門の内へ道入る跡に兩人途方に暮れ路用の金
はなし死ぬより外に仕様はなひと覺期の所へ傳五郎二役
序幕の手代にて鶴藏の織掛と連り出て兩人を留てお内義
の瑞幸も御親類の意見にて今では後悔お袖殿を殺にして
お店へ入れお家取も可愛がつて上て下さる様お跡を尋ね
て参り升た(鶴)わしも金箱の娘を玉なしにする所御親類
方の御意見で御心を捨跡を尋ねてあり升た(家)扱はいつ
ぞや古寺にてお咲の死體と思ひしは橋の變化の仕業で有
たかト是より目てたく様へ飯り飯りするといふ件にて幕
○本舞臺箱根の塔の温泉泉座敷の道具爰に市藏の劍學者
門第四人と酒を呑居て隣座敷の屋鋪娘を手入れれる工風
はなひかと言合せ今風呂から上つて此様側を通れば何か
御相と申掛け立腹致すを先生か御中裁にて娘を引入れ夫
からお手に入れる御工風と門第四人様側へ出て助つて居
る下手より松之介の八重梅橋上り形にて出て來り此中を
通り掛るを門第一人足踏んだと言懸り松之介を座敷へ

引入れ市藏酒の相手をさせる爰へ鶴藏の佐五平出て降れ
と聞入れ門第四人にて打すへる此件にて道具廻る
○本舞臺同じく温泉場離れ座敷の道具爰に福介の正作住
居平ぶたい新藏の温泉の息子女形の湯女大勢お罷り居て
此座敷の客に惚れて居る女有て岡崎餅の明翠女邪魔とす
るせりふ新藏に呵られ皆々外の座敷へ出て行く跡へ千鳥
の此家の女房以前の鶴藏を連れて出て表座敷の乱法な客に
此御老人の御主人の娘を引上られ其儘置は手込にもされ
様かどの御心配どうぞ無難に娘御をお取戻し下さる様に
お見かけ申て願ひ升ると鶴藏と俱に頼む福介迷惑なるせ
りふ有て何れの家來だと聞く(鶴)因州の島取彌平井庄左
衛門の若館佐五平中人の娘は八重梅と申者福介是を聞權
八殿の云号とあれば父の代より入魂の中取戻して進せ様
と身支度とする件にて道具廻る
○本舞臺元の表座敷の道具に成る爰に以前の市藏松之介
を寄引せ門第四人取寄大酒盛無理に松之介に酒を迫り今

曾以抱て寝ると云ふせり。爰へ福介鶴藏を案内に連れて
 出て娘を戻し具と頼む(市)見れば立派な侍ひ故試合の勝
 負を致た上にてこちらが勝たら戻して遣う。是より柔
 術の試合に成り皆々福助に組伏られ閉口して松之助を返
 す鶴藏悦ぶ福助松之助を連れて歸り行く跡に市藏残念がり
 一旦此家を歸り彼れが連撃へ忍び込て此返報に討取り
 呉れ心と門路を云合せ下女を呼んで歸る件にて道具廻る
 ○本舞臺元の階段の道具松之助鶴藏福助に禮を言て居
 る千鳥の女房出て舞臺者の客が歸り升たれば最ふ御安心
 と二人を連れて道入る福助今宵は早く寝様と言ふ所へ新
 藏の息子團落の敵討が仕度と来る福助今宵は試合で草臥
 たれば早く寝たいと斷り新藏下女を呼出し床を敷せ屏風
 を連廻させお休被成いと別れ行く福助寝る爰へ市藏門第
 四人を連れて忍び入り福助を討ふとして仕損じ取押へら
 れる此騒ぎに新藏始め若者大勢弓張提灯を持出て來り
 門第四人を縛り上る福助市藏を切下げる此時夜神樂の木

鼓明ゆる(福)の太鼓は(新)かれは近日此山の荒八神の
 社にて祭を行ふ神樂の種古(福)曾我兄弟を祭る幸先とや
 つめを討たるはよひ血祭であつたと言ふ件にて幕
 ○本舞臺箱根曾我神社の道具爰に祭商人の仕出し三人立
 羅り居て淨瑠璃齋を讀て道入る常盤津の淨るりに成り向
 ふより福助寄福市藏鶴藏傳五郎勘五郎新藏向も手子舞の
 拵へにて牡丹の花笠と肩へ掛け扇を持出て花道にて舞事
 有て舞臺へ来る跡より松之助の踊の師匠鶴幸千鳥の舞者
 の手子舞明石政次郎小傳次竹松の若衆の手子舞出て振事
 有て飾々仕立の踊りよろしくト福助家福獅子を以て
 出て蝶に戯むれる振わつてト舞子の狂ひに成り皆々是
 を取巻き引ばりの見得にて頭取出て先今日は是ぎり目出
 度打出し

明治二十年六月廿日御届

(定價金八錢)

編輯兼
出版人

淺草區馬道町七丁目一番地
谷口貞治郎